【ポスターセッション】

在宅高齢者における生活満足感とその関連要因

ーA ニュータウン B 市の調査からー

○　東洋大学　　氏名　白男川　尚（会員番号 8317）

キーワード３つ：ニュータウン高齢者、生活満足感、団塊の世代

１．研 究 目 的

日本の高齢化の特徴の一つとして、団塊の世代が一気に高齢者になることが挙げられる。特にニュータウンと呼ばれる地域では、日本の高齢化のスピードよりも早いことが特徴として挙げられる。

このように、同世代がほぼ同時期に入居して高齢化していくという地域特性があるニュータウンの在宅高齢者を対象とした大規模な分析は、ほとんどない。

一方、生活満足感に関する先行研究では、その重要性が示唆され、さらに、主観的健康感等との関連が示されている。

本研究の目的は、ニュータウン内在宅高齢者の生活満足感の比較を試みながら、各項目との関連を明らかにすることを目的としておこなう。

２．研究の視点および方法

調査対象は、平成 19 年 10 月 1 日時点の都市部 A ニュータウン B 市に居住する 65 歳以上の在宅市民全員（25,316 人）を対象に、郵送配布回収方式による自記式アンケート調査を実施した。分析対象者は、15,428 人(回収率 60.9%)の中から、記載が充分でない 234 人を除く 15,194 人であった。

分析では、生活満足感「はい」、「いいえ」別に多重ロジスチック回帰分析（強制投入法）を用いて検討した。

説明変数としては、年齢、性別、外出回数、居住年数、最終学歴、世帯年収、近所づきあい。主観的健康感、主観的幸福感であった。

３．倫理的配慮

倫理的配慮としては、回答は強制でなく、個人が特定されないよう無記名で行い、分析

は統計処理を行い個人が特定されないよう配慮をおこなった。

４．研 究 結 果

生活満足感に関しては、現在の生活に満足しているかを質問し、「はい」8,639 人（68.3%）「いいえ」1,996 人（13. 5%）、「どちらともいえない」4,182 人（28. 2%）であった。

その他、性別はニュータウン内在宅高齢者の男性 7,130 名（46.9%）女性 8,064 名（53.1%）であった。

年齢は平均年齢 73.18 歳、前期高齢者男性 4,810 名（31.7%）は前期高齢者女性 4,940 名（32.5%）、後期高齢者男性 2,320 名（15.3%）は後期高齢者女性 3,124 名（20.6%）であった。

主観的健康感は、「とても健康である」1754 人（11,7%）、「まあまあ健康である」9,886 人（65. 7%）、「あまり健康でない」2,296 人（15.3%）、「健康ではない」1,106 人（7. 3%）で、主観的幸福感は、「非常に幸せ」3,775 人（25. 6%）、「やや幸せ」8,849 人（60. 1%）、「あまり幸せではない」1,875 人（12,7%）、「全く幸せではない」233 人（1,6%）であった。

重回帰分析の結果、生活満足感別「はい」「いいえ」でみると、性別は男性、年齢が若い、学歴が高い、主観的健康感が肯定的、主観的幸福感が肯定的、居住年数が長いことがそれぞれ関連していた。

一方、外出回数、近所づきあい、世帯年収では有意差は認められなかった。

5. 考 察

生活満足感に関して、先行研究と同じように、主観的健康観や主観的幸福感との関連が認められた。また、性別では男性、学歴が高いこと、居住年数が長いことでも関連か認められ、ニュータウンでは、特に昼間会社勤めで他の地域に出ていたと思われる男性が生活に満足をしており、居住年数が長いことによって地域に愛着を持って生活に満足することが示唆された。

今後の課題として、本研究では、生活満足感と関連項目のみを分析したが、他の関連項目との比較や他の地域の比較などで、さらなる検討をしていく必要がある。

（本研究は首都大学東京　星旦二研究室との共同研究の一部である）